

「この方が神を示された」
(ヨハネによる福音書 1:1-18)

わたしたちは、もともと、神さまに似せて造られています。けれども、いくら似せられてはいなくても、わたしたちは完全ではありませんから、正しい道を進んでいると思っても、いつの間にか道からずれてしまいます。

それが、わたしたち人間の「罪」と言われているものです。「罪」とは、ギリシャ語の原文ではハマルティアという単語です。たとえば弓矢の競技で的を外れた時に「ハマルティア！」と叫ばれたようです。「的外れ」ということです。的を狙って矢を放っても、手元での数ミリのズレが的に到着する頃には大きなズレになります。それこそが、わたしたちの「罪」なのです。神に向かっていると思っても、完全に正しい道がわからないから、少しずれてしまう。そして、気がついてみたら大きく神さまから離れてしまうのです。

人間はそのような存在ですから、いよいよ神さまとの距離が離れてしまい、もはや自分たちがどのように歩めばよいのか、どうすれば救われるのかわからなくなってしまいました。それが、イエス様がお生まれになった頃のイスラエルの人々の苦しみです。しかしこの苦しみは当時の人々のみならず、今を生きるわたしたちの辛さでもあります。どう生きれば、歩めば良いのか。わたしたちもさまよいます。しかし、その苦しみの叫びを神は聴かれます。そしてわたしたちのために主イエスを送ってくださったのです。

「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。」この世界を創造した神の言、神の意志であり、神そのものである言。神そのものが、わたしたちとおなじ「肉」となれた。なぜなら、それは今日の福音の最後にある通りです。

「いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである。」神から離れてしまい、神のことが分からなくなってしまったわたしたちのために、完全なる神が完全なる人として「わたしたち」のところに来てくださったのです。主イエスがわたしたちと同じところに来てくださったから、親しい人のことをわたしたちがよく知ることができるように、主イエスを通して、わたしたちは神を知ることができるのです。だからこそ、主イエスは暗闇で輝く光なのです。

神が分からず、さまよってしまう人の間に、道であり、真理であり、命である方がお生まれになった。「恵みと真理はイエス・キリストを通して現され」ます。